

# 本当の東京の話をしよう

もゆ

「それでも、性根は隠せないものだね」

「そうよ。つて、え、なんのこと?」

「あんたバカア?」、電話の向こう側、女は叫んだ。

「本放送からもう十年に近い歳月が流れたと  
いうのに、無理もない、性根は隠せないものだ。」

「あたしとのデート蹴って、ジャスコに行くで  
すって? 莫迦も休み休み言いなさい」

私は大仰にためいきをついた。「きみがジャス

コのなにを知つてゐるつていうんだ?」

「『下妻物語』で観た。……あんたといつしょに  
観たんじやないか」女の声はどこか不安げに、

半分にちよん切られた疑問符を含んでいた。

「渋谷のシネクイントでね。行つたことはない  
だろ?」

「あるわけないじやない。こちとら麻布十番温  
泉を産湯に使い、自由が丘のお屋敷に住まう深  
窓のお嬢さまだぜ」

「いいじやない、行つたことなんかなくつたつ  
て。それより、あたしと恵比寿ガーデンシネマ

で映画を観よう」

「モーターサイクルダイアリーズ』か

「そうそれ。ゲバラ好きでしょ」

「ゲバラは好きだが、」初めて女のコに告白する  
ひっこみ思案な男のコみたいにおずおずと私は  
告げた。「実はもう新幹線の車内にいるんだ」

「え、新幹線? 新幹線で行くの?」

「ああ。止めてくれるな、おつかさん、背中の  
牡丹が泣いてる、つてね」

「止めないけどね、あたし、あんたのお母さん  
じやないし。でも、新幹線つて、莫迦じやない」  
「莫迦でけつこう。ところで、土産はうなぎバ

いでいいかい?」

「え、浜松のジャスコなの? ……真夜中のだ  
つたら許してあげる」

発車のブザーが鳴った。

イヤホンを耳からはずすと、Tokyo No.1 Soul

Set が鳴りやんだ。横浜に住んでいた高校生の  
私が、それをこそ東京だと信じていた音楽だつ  
た。なんてもちろん、与太に決まっていた。東  
京に幻想を抱くには、横浜は東京に（そのころ  
の私にとつては渋谷に）近すぎた。

車のドアを開き、私は助手席にすべりこんだ。

「どうですか、浜松の第一印象は?」

運転席の男が訊ねた。浜松に日本最大の、畢

竟世界最大のジャスコがあると誘つた男だつた。

「うむ、ううむ、」

まとまらない思考に私は喘ぎに似た溜息をも

らした。

「さびれている、と、思いませんでしたか。小  
さい街ですから」

「しかし、地方都市なんて、どこもこのよう  
なものだろう」

「ええ、そのとおり。どこもかしこも、そう、  
東京とその郊外を除けば」

「駅ビルの本屋に行つたんだ」

「ああ、どうでした?」

「文芸書が多かつたな。技術書も多かつた」

「浜松でもつとも文化的な本屋ですからね。技  
術書は、理系が多いからですよ。ほら、発動機  
屋で有名でしよう」

「なるほど。後は、結婚雑誌が少なかつたな。

育児雑誌は多かつたのに」

あるいは、ゼクシイやらなにやら、棚ひとつ  
丸々いっぱい占領している渋谷のブックファー  
ストが異常なのかもしれない。けれども、どち  
らが異常さを抱えているにしても、差異はやは

り存在するのだ。

「まあ、判りやすい説明はつけられますけどね」

「ああ」

世界は嫌になるくらいの判りやすさであふれている。そんなことは判つていた。判つてい

て、私は眼をそらしてきた。けれども、判りや

すさは圧倒的な物量で眼前に迫りつつあつた。

「見てください、遠くに見えるあの巨大な建造物、あれがジャスコです」

ジャスコが視界に入つても、たどりつくためには長い長い時間がかかつた。制限時速二十キ

ロオーヴァーで、私たちは街道を飛ばした。

街道が渋滞していた。新しく開店したユニクロの駐車場が満杯で、道にまで長い長い列を作つていた。

唚然とした私をちらりと見て、運転席の男が囁つた。

「驚くにはまだ早いですよ」

口を開いたまま、頸を回し、彼を見た。

「さて、そろそろ到着です」

「おお」

「しかし、ここからが本番ですよ」

「え？」

彼は眼で道に立つ男を示した。男はプラカードをかかげていた。「駐車場満杯です。ただいま、

一時間待ち」

「ちょ、ちょ、ちょっと待て」

「なんですか？」

「あの巨大な建物は、ほとんどが駐車場なんだよな？」

「ええ、三五〇〇台停めるられるらしいです」

「そ、そ、それが満杯なのか？」

「みたいですね」

「三五〇〇台って、一万人近く客が来てるってことだよな」

「ちなみに浜松市の人口は六〇万です」

今度こそ、本当に開いた口がふさがらなかつた。

アメリカから直輸入したはずのモータリゼーションが、この国に着地してどのように花開いたのか、私は初めて感覚しつつあつた。自動車産業の末端で働いていてさえ、私はそのことを判つてはいなかつた。

「一時間もはまたなくともいいんですね。さあ、そろそろですよ」

「今、来ている服、どこのですか」「コムサのモード」

「ここにあるコムサはイズムだけです。値段が一桁違う。判りますか？ ここには外部なんてないんです」

ジヤスコ、正しくはイオン、つまりショッピングモールと低価格帯のスーパー・マッケットである狭義のジヤスコの複合体は、サイエンスファイクションのなかでも行儀の悪いものとされる部類の小説に良く出てきた環境建築のように見えた。住居を機能のなかに備えていないことを除けば、まったく自己充足的に見えた。

窓がなく、内部は螢光灯の灯で煌々と照らさ

れ、一時間もなかにいれば外部など存在しないと本気で信じられるようになりそうだつた。

「外部などありませんよ」

「うん、きっとそういうんだろうな」

「ぼくたちが外部があると考えているのは、ぼくたちが外部から来たからです」

「ああ」

「もしかしたら、これは人工衛星みたいなものなのかもしれないな。ひとびとは皆、駐車場にRV車を停めてそこで寝泊まりしている」「そんなの当たり前ですよ。それとも、いう言いましょうか？ Welcome to the desert of the……」

彼の言葉、その最後の単語までは聞き取れなかつた。

もしかしたら、それは「real」ではないもつと重要な単語だつたのかもしれない。

「大きなつづらと小さなつづら、どっちがいい？」

「ええと、ええと、」女は真剣に悩みはじめた。

私は女のジーンズに掌をかけ、ホックをはずし、ジッパーをさげた。

「もう、えつち」

「つかぬことを訊くが、」

「ん？」

「このジーンズ、どこで買った？」

「……G A P」

私の掌が動きをなくし、やがて空気までが凍つてつき、空調の音だけが狭い部屋に響いた。

「な、な、なによ、その沈黙。どどどどうせ、

下は無印のショーツだし、キャミはユニクロのパット入りだけど。ええ、ええ、2ちゃんで彼氏できない下着つて呼ばれてるアレですよ。なによ、あたしが色気のない下着はいてて、あんたになんか迷惑かけた？ いいでしょ、楽なんだから。ほつといてつ」

「そんなきみには、大きなつづらを是非お薦めするね」

「これってなかなかに入つてるの？ 大きさの割に軽いんだけど、服？」

「尼崎直輸入ジャージだ。あいた、いたいたいいたい」

女は小さいつづらで私の頭をしこたま殴つた。箱の角が痛かつた。

「じやあ、こつちは？」

「（バ）希望どおり、うなぎパイV S O Pだ」

「きやあ、パイが崩れちゃうじゃない」女の掌がようやく止まつた。「……ねえ、着てみてあげ

ようか？」

「ん？」

「ジャージ。せつかく買つてきたんだしさ」女は包みをびりびりと引き裂きながら告げた。「じやん、生着替えショー」

私がうなずくよりも早く、なぜか上機嫌な女は鼻唄を歌いながら、ずり落ちかけたジーンズから練馬大根みたいに健康的な脚を引き抜いた。ジャージの上下を身につけ、なにかを挑発するよう腰をくねらせて踊つた。彼女の眼もまた、なにかを挑発しようとしていた。

「どう？」

「端的に言うと、ヤンママっぽい」

「ひ、ひどおい。ねえねえねえ」

「なんだ？」

「ヨクジョーした？」

「……」私はしばし押し黙つた。歯の間から、押し出すように口にした。「も、もちろんさ」

まさしく、資本主義の名のもとに速度と距離の逆説的な絶対性がそことここを分けるのだ。

彼女は私をじろりとねめつけ、

「あんたなんか、あんたなんか、うなぎバイ食べて出直してきやがれ！」

彼女たちと彼女たちを分けたのはいつたいなんだつたんだろう。浜松のジャスコにも無印が入つていて、ソニーブラも、ヴィレッジヴァンガードも入つていて、私の眼の前でジャージを着てモデル立ちしている（自称）山の手のお嬢さまと、身につけているものはほとんど変わらない。にも関わらず、そこにはどうしようもなく絶望的な違いが存在する。